吉田夏彦先生のご退職にさいして

清水多吉

吉田夏彦先生の最終講義のテーマは「形而上学」というものであった。科学基礎論学会の会長をしておられる先生のことであるから、おそらく過去のあるいは現代の形而上学的思考に激しい攻撃を加えられるだろうと誰しもが予想したはずである。しかし、あにはからんや、先生の講義は多様な形而上学の存在を認め、それぞれの形而上学的思考にその所を得させるというものであった。私自身は形而上学には無縁で、認識論しかも社会化された認識論をテーマにしている。社会化された認識論を十九世紀、二〇世紀の西欧諸思想に求めて行けば、当然にも認識論を超えた形而上学的思考に基づく思想や行動様式にぶつかる。それらに対して賛否を言う前に、社会思想的現実としてそれらの存在を認めるのでなければ、私の研究テーマは成り立たない。そのような意味で、研究領域のまったく違う私としても、吉田先生の最終講義の結論には賛成である。

今、先生の最終講義を話題にしているのは、先生の学問、業績を紹介するためではなく、先生の人柄について述べたいためである。えてして一つの領域に精通すれば、他領域の問題に無関心になるか、もっと悪い場合に排他的になる。先生は排他的という言葉とはおよそ無縁な方である。それは、対人関係ばかりでなく、過去の哲学者に対しても

そうであった。この数年のおつき合いで、過去の哲学者に対しては、ただ例外的にヴィトゲンシュタインに対してだけ、皮肉なジョークで笑いとばされたのを聞いたことがあるだけである。私の専攻領域の人物ではないが、ヴィトゲンシュタインについては、日頃、畏敬の念をもって取扱ってきた。というのも、彼は断片的ながら言語哲学については二〇世紀思想の一つの極をなしていると思ってきたからである。しかし、私は先生のジョークから現代の科学哲学の分野でヴィトゲンシュタインがどう取扱われているのかを直感した。私の専攻領域は先にも述べて置いたように社会的認識論であり、具体的に言うならフランクフルト学派という。この学派の第一世代は、近代の科学的認識に対する批判的考察をその根底にもつ。先生にとっては、本来なら論敵とでも言うべき学派である。しかし、先生の意見は、この学派によって近代の科学的認識に対する反省的気運が広まってきているのは承知しているが、その批判の根拠、その批判の論理がもっと合理的でなければならないでしょう、というものであった。ムード的科学批判が多い昨今にあって、この反論などはもっともなものであり、再反論の必要のないくらい当然のことである。

さて、そのような人柄の先生から、私自身が学んだことはもう一つある。それは学生に対する問いの発し方である。普通、私自身も学生に向って問う時には、「デカルトの〇〇」「カントの〇〇」「ヘーゲルの〇〇」について知っていることを述べよという形をとる。考えてみれば、これは哲学の問いというより、哲学史の問いであり、もっと具体的に言うなら、学説史についての知識を問うのであって、学生本人の意見、哲学に対する学生本人の構えを問うているのではない。学部学生に対してなら学説史についての問いもあるいはやむをえないかとは思うが、大学院生に対しては、いつまでも学部学生に対するような問いでいいものかどうか、ふと思い迷うことがある。この点、先生の問いは終始一貫しておられる。例えば、「自由と責任の関係について」「感覚と論理との関係について」云々といった問いがそれである。これなら、哲学史上、どのような思想、どのような哲学者を追求してきた者でも答えられるし、しかも

学生本人の哲学に対する構えも聞き出せる。このような問いは、科学哲学からの問いというより、本当は、社会哲学、社会思想史でもありうる問いのはずである。自分の心情に忠実に生きる倫理か、結果を引き受けて生きる責任倫理かは、マックス・ウェーバーがどこでどのように論じたかという学説史の問題である以上に、日々を生きるわれわれの日常に対する構えの問題である。ここまで分かっていて、私自身、従来の設問の仕方を捨てきれないでいる。

察するに、これは過去の思考性の点検とその点検の積み重ねを必要とする社会哲学と、現時点での思考性の幅とその可能性を問う科学哲学との差異にも起因するのではないかと、みずからを慰めている昨今である。それにしても先生の姿勢は一貫しておられる。あのような問いは、本学における院生に対してだけの問いであったわけではない。院生への出題傾向を試べようと思い、かって他大学院の過去問題を調査したことがある。すると、お茶の水女子大学の過去問題に類似の諸問題を見い出した。多分、あれらの問題は現職時代の先生の出題だったのだろうと拝察している。過去の権威にとらわれることなく、常に現存の「知」の可能性を探る科学哲学者に、ひそかな畏敬の念をこめて、今、吉田夏彦先生をお送りすることになる。願わくば、先生、非常勤として今後とも、院生のみならず、惰性的に権威に寄りかかりたがる私どもを、末長く叱責して下さらんことを——。